

10/21スト成功のために

スト実行委員会に結集せよ

Ⅲ 10/21ストの意義を我

我々は、10/21を頂点とする今秋の闘いを、バトナ
人殺戦、抑圧露骨、安保政策、佐藤打倒、特選を
ネストとして闘う必要があることを知る。

ゆえに、その闘いの基本的目標は、はなはちと
佐藤打倒でありそのための一切の勢力の結集であ
る。又、その闘いは、安保闘争そのものではない
ばならない。

ゆえに、パリ公談と呼吸し、最終局面をむかえ
つつあるバトナ共和国主のバトナ侵略と、北
爆完全停止、米軍撤退へと迫りつめ、アジアの平
和共存への条件を二反成敗させ、

Ⅳ 今更け、本土の大衆運動の課題にさうやく
はいつつある抑圧露骨の闘いを、二日抑圧三大選
挙に於ける復讐勢力の勝利への闘いとこの連帯、結
合の中で、徹底的に前進させ、政府の核基地付与
返還、それにむくめる反動的な一体化策を挫折さ
せ、抑圧無条件即時全面返還への道を切り拓き

Ⅴ 日米共同声明の果敢化を急ぐことにより、70
年アジア侵略、核安保への道を歩む佐藤政府を、
鋭く安保政策勢力の総攻撃とその闘いの爆発で弾
立させ、打倒することである。ヤウに、

Ⅵ 我々は、その様相闘いの展開に、安保政策後

の展開、平和共存非武装中立を明確に与え、闘い
の前進と統一をめざす必要がある。

Ⅶ 闘いの現局面

我々は、今春の4/26-28闘争の段階から、バトナ
△反成敗と抑圧露骨、安保政策の闘いを一体とし
て闘うこと、そしてその闘いを佐藤打倒の闘いと
して闘うこと、ゆえに、街頭中核的闘いを克服し、取
場、学国を具として徹底的組織化を行う必要を提
起してきた。

ゆえに、4月闘争は、四三派、民多同の共闘地帯
民多同には、その様相ものとして理解されず、様々
にシンボル化された現地闘争へと分散し、政治意
識の深化、対佐藤打倒の取場、学国のストライキを
なくも全面的政治闘争への発展は、我々の努力に非
ずる大きくさきに示された。

Ⅷ さらに、その4月闘争の限界を切り拓くべく闘わ
れる必要のあり、たのちに中へとする6月闘争も、当
初から掲げていた限界を十分に突破しえな
い。下。

Ⅸ 我々は、6/15闘争で市民主義的傾向を色濃くもつ
部分にさう主張され、大阪の一定の成果をのぞくと
組織闘争の参加が弱く、それと切りはなされた所
で出陣者、学生、市民化を組織して反平運、反公言

年委員会、諸々の市民組織が闘いの中であつた。

Ⅹ その様相闘いは、決して天のワクを二えた闘いとして容易に解
散できない。我々のワクを二えつつも、現在の闘いの中に色濃くあ
る戦術民主主義、平和憲法公の妥協的依存傾向を克服することは、バ
トナに代表される個人原理の徹底化による国家の対決であつた。こ
現在の反成敗年委員会にみられることこの取場生産力うけはれた街頭
ラジカルなムでは決して果されたい。又、それらの傾向は、既成組織
「ナセンス」と今までの闘いとま、たぐ対立的に闘いを設定している
、このことも危険な誤りである。

Ⅺ その様相中で、一定の成果をあげた大阪の闘い、大阪屋敷場を中
としたその努力の内容をみてみる。大阪の闘いが、まかりなりにも
一定の組織闘争の参加をもちえたのは、まずオ一に、あやゆる機会
を通じての一貫した労組組合への平和諸問題に關しての働きかけであ
り、オ二に、実行委員会にみられる如く、大阪にあらわゆる反成
平和組織の共同行動の一貫した追求である。

Ⅻ 我々は、その中から次の事を引きださうなだらう。それは、労作者
階級の組織的決定は、まずなにをも、取場、生産点での一貫した反
成平和意識その勢力の組織化であること。それは当然とも言えること、
、厳しい取場を通過しての資本家の攻撃の中で妥協に放棄され打ち
であることである。以上の事は、学生運動にありても一定あてはまる
、つまり、現在の学生、平和、民多同運動の片は、この階級の中で、
一貫したクラス討論が放棄され、妥協はクラスストライキだけの「ヘル
トデモ」へとながれていっているのではない。

Ⅼ 我々は、現在の闘いの限界を、タイナミックな大衆運動の形成によ
り克服しなければならぬ。そのためには、オ一に、明確な大衆的政
策でありオ二に、徹底的なクラス討論の一貫した追求であり、オ三に

(4) タイナミックは大衆運動一層として学生運動の形成にとつて重要な、明確な大衆運動政策とは、反戦平和の論議、諸国争を現代世界における真の平和戦略、平和共存、非武装中立人の民衆との関係で生き生きと提起するものに他ならぬ。これ、現在の反戦平和の陣いの中心は、平和共存、非武装中立人の無制限などの陣いの指導的部分にあつて多く存在する。

共黨（系）の現在に於ける様々は努力は、必ずす
 こも過失の不十分は平和共存路線の革新の方向で
 あらわれぬのではなく、その放棄あるいは、そ
 れとのいたずらは対決として展開されてゐる様
 に我々には、みえぬのはどうしたことを
 我々には、彼らが分裂したか日本のこえ系の諸
 君と同様に、平和共存を現状維持的体制間平和共
 存としてしか理解していなかつたとしたらその放
 棄は、ある意味では当然と理解するが……
 とに近く、我々は、次に、彼らの誤解をみる中で
 彼らの真意を探りたい。

③ 平和共存、非武装中立
の正しい理解を。ひとくく
民衆同（共感氣）諸君へ）
天に誓へに如く、我々は、民衆同（共感氣）
の「変革の成士」"「スバルタウス」など材料に
彼らの立場を採つてみた。ところで、我々は、
彼らに、彼らの最在に於ける「平和共存」に關す
る見解を提出するべきをこのために、何故ならは
彼らの安否中絶に關する見解、又、非武装中立へ
の批判など、彼らの平和共存に關する見解との
關係で一切述べらるべきに在るからであり、そして
最近、平和共存に關する見解が、いかに彼らから出
されてないものである。我々は、平和共存の事
新、發展の立場に立つものとして、平和共存路線
の一層の深化のために、彼らにそれを求める。

④反戦反安保のストーリーブック
いて.

まず、彼らが、最近なにを思つたか必死に唱へたのは「反戦安保條約なるスローパン」ともいひながらスローパンに關して、彼らの初步的誤りを指摘する中で批判を加えておきたい。彼らは、そのスローパンを何が大發願で出したかの如く思ひ違ひをし、それにものともなうくハッキリをつけるため方針には、レーニンまで引き出して立てている。レーニンもいふ、いふ、いふ、いふ。

(2) したが、何もローニンまで引き出さなくとも、大衆運動の
小口ハを知っている人なら当然、スローパンをまずにはや
ゆいに明確な方向性と目標を与えねばならない事は、容易に
理解できるであらう。スローパンの方向性と目標は当
然、人民大衆の状態をかきえたものでなければならぬのは
、二れまでにすく理解できなければず。

あり、彼等のスロー・パンに關しての理解は、それは、果
 体的に於くと次の如くになる。安部鶴堂に關して、現在、
 未だ安部の段階的理解を望んでゐる人民はあり、安部鶴堂を
 九十九人の多数派と置いてゐない。彼等は、その事を理由に
 安部鶴堂のスロー・パンは非現実的だといふ。そういう事にな
 ると、彼等はせうかくロー・パンまで誤計な所を、先に述べた
 スロー・パンに關する疑問を向へる何んら理解せず、スロー・パン
 は、人民大衆の状況をそのまま表現したもの、ととらえて
 いたし事になる。人民大衆の状況は、いまおぼつたといふ
 べきのまま表現するので決してない。向んの安部鶴堂も、トモ
 急ぐまは、スロー・パンなんて無意味以外の何ものでもない。

の我々は、彼等の発見は、彼等も又批判してやまい、民衆の大衆連民主主義にもつくウルトラ日和見的思想、全學生一人の二つすストに賛成でなければ、ストを提議するまい」と断言してゐることを見出し、これをどういふ、大衆連民主主義により、眞の対立点と仰い方向性を學生に提議できない民衆の伝統的誤りを、君達も、おれ等も、このやうな、

ゆゑ、彼等の文章をみると、我々の任務は、現安保の弱体化、もしくは、段階的解消とのそんでゐる人民の中間部隊で、明確な反安部隊として養成し、《安部の戦士》とあるが、これは明らかなに論理矛盾である。《安部隊までいふのは、中間部隊に在るから》反安部隊であるはずなのに、その中間部を反安部隊に養成するとは、

我々は、政府自衛隊と安部隊の明確な部隊を養成せず、一方我々の側も安部隊勢力を明確に人民の中間部隊としていふ現在、そのやうな、真の対立点として安部隊と安部隊を明確にすることこそ必要であり、さうに、安部隊の養成として労働者人民と中間部とを反安部隊（戦線）に支えられた平和的、民主的政府による平和な非武装中立の展望を、平和として与へていかなければならぬと考える。又、平和共有、非武装中立という立場には、中安部隊勢力の総結束、その人民の中での多数派は、とても果てない。トロツキスト諸派のいうところの「世界革命」、社会主義樹立のほめて、安部隊勢力を人民の多

数派にいつまでも居てもよい。そして、民衆（未だ安部隊）の反安部隊も、それ、中

いに方向性を示さねばならぬ。さう文句であるが、故に安部隊勢力を養育することはできない。

我々は、具体的にいふ政治諸行動を通じて、その中で著明に眞の対立点とその展望を与へてい、人民の圧倒的多数を安部隊勢力に与へてい、いさ平和な非武装中立の日本を切り拓くことこそ現在も、最も必要とあると考える。

ゆゑ以上の確信のもとに現在、我々は、10月戦争をハトム反戦、中安部隊、安部隊、佐藤打倒、安部隊とストとして仰うことを提議し、とりわけ佐藤打倒を高く掲げたい。最後に、民衆（未だ安部隊）諸君、これさうな、スローガン

あそびはやめて平和な非武装中立の理解をこそし

(1) 平和中立の路線の革新的理解を、

次に、彼等がズバタラス、ゆゑ日本の二、三の非武装中立を批判してゐるが、その中で、又もや彼等が大衆の大衆の如く強硬な安部隊、単なる政策ではなく、国内的、対外的支配体制であるに於いて、さう考へてゐる。

(2) 我々は、当然の事として、日米安部隊彼等のいう政策で、単なる政策ではないこと、それは、明らかに軍閥同盟としての諸権威（軍閥、軍地、軍閥工場）にうつつち、単に体制であり、又、

対外政策としてだけではない、たとへば「自衛隊の非武装中立抑圧への登場」の如くに国内の抑圧政策としての役割をも果たすこと、二つまたあつたまの二つである。それは、日本の二文諸君も知つぬとは思へない。

ゆゑ、我々は、その様子を二つにあるのではなくて、重要問題の両面は、次の二つにあると思ふ。それは、安部隊勢力との反安部隊のゆゑ、平和共有へのゆゑ、現状変革的、攻撃的は大衆連隊のタキシットは展開とそれに支えられた社会戦争との結合でもって仰うが、それとも、成后平和、民主主義憲法の防衛的、徹底的、社会主義的傾向に安部隊に依存したままでは、政策カンパニアとして仰うがである。

ゆゑつまり、それは、ゆゑの如くも言いつた、平和共有が、体制抑圧抑圧の「米ソ平和共有」などに至る化され、ハトム反戦戦争と世界の新しい平和、民族解放戦争と十分結合されず、現状維持的のものとして展開されていく危険は、何れ一方であり、他方民族解放戦争と新しい反安部隊戦争が、それまでの平和共有のゆゑと機械的に結合する形で進行せらるゝとしてあり、反安部隊戦争が、国際的にも国内的にも分裂を二層に分けてゐる中で、その革新を果すの、否、ハト日本の二文の立場である。

ゆゑの様に、我々は、平和共有へのゆゑの内容を、正しく意味での体制抑圧平和共有のゆゑ、軍閥のゆゑ、民族解放戦争、先進國でのハトム反戦戦争、ハトソの解体、安部隊勢力と軍閥同盟の対立、政府内戦争、軍閥の諸戦争の全世界人民のゆゑに於ける非武装的統一と理解し、現在の反安部隊

争を革新し、その分裂を統一しなければならぬ。

(6) 当然の事に付加えておけば、平和共存の陣いとは、戦争と侵略を生み出す社会構造の改革であり、さらに具体的にいえば、戦争と侵略の軍事構造とその勢力そのものの全面的廢絶(軍隊、基地、軍事同盟、軍需産業の掃蕩)の立場である。それは、又、核兵器の出現によつて、自国の防衛はたつて他国の攻襲の目標とされ、世界の軍拡の緊縮の激化を促進するばかりであつて、世界の緊張緩和つまり、平和共存と完全軍縮のためには、究極の平和は付いてという現代世界の情勢の正しい科学的理解にとつていふ。

(7) 我々は、以上の様な立場にたつてはじめて、トロツキスト諸派の如くの盲目的は何んの展望をもたない現地一点突破的反権力戦争とは区別された、真に展望をもつた現状改革的、攻勢的平和戦争を大膽に正しく提起しようのだ。日本のニエは、それが出来ない。

(8) つまり、現在、激化する侵略加担の具體的あらわれに對する諸陣争を次の如く陣いする。つまり、戦争と侵略の事業を二つとく系統的に暴露し、その陣いに生産点、労作者、地域住民を中心に組織し、その陣いを戦争と侵略の政策への陣いへさらすには、その政府の打倒へと有機的に発展していくと陣いすること。そして、その攻撃的陣いの高揚は、明らかに對政府打倒から労作者人民に基礎をおく政府の樹立を労作者階級のゼネストを中心として全面的政治戦として陣いすることである。

(注) 以上の如くの侵略と戦争の要素の系統的暴露の陣いを

陣争同(共労党系)は、侵略加担重点となつて陣あつてしまつてゐるが、二れもまた彼らのフラクマティックはシンボル化の技術にあつて、政策との陣いとの関係、さらに政府打倒の陣いへの展望との関係は不明確となり、いだらうに一時的にせる基礎機能をマヒさせるほどの無意味なラジカリズムの傾向を露れ、トロツキスト諸派と區別がつかなくはなつてゐる。

(9) 陣争同(共労党系)諸君、日本のニエ派への批判は、以上の如く展開すべきではない。我々は二二でも、君たちの勢力に平和共存の革新の観点から見て、日本のニエ派への批判を鋭くをみき、フラクマティックなものとなり、すぐ逆襲され、ど、ちもど、ちになつてしまつてをみざるをえない。

四 目取后ト

最後に、当然の二とはから、我々、現在佐藤打倒という陣い、それは、三木前度ほどの反佐藤勢カも含めて佐藤打倒をい、つまり、現在の政府独占と深く鋭く対決するものとして提起してゐる。三木、前度ほどが、ニエ派の差はあれ、いずれも目米共同声明を基本としてゐる二とは、明らかにである。そして、その二とは、現在の日本独占の示向を基としてあり当然ともいえる。

(注) 終戦選挙を前にしての反佐藤勢力の動きに安易に、政府独占の分岐をみ、非武装中立の現実性を

それとの関係でみるつとする日本のニエ派の核は、小なりさいいオアチュニストは、明らかに批判されねばならない。

我々が、平和共存、非武装中立の展望をきたる時、それは、当然、労作者階級を中軸とした反権力勢力の一切の結束、反権力統一戦線に支えられた平和的民主的政治樹立である二とはいうまでもない。

そして、我々が、現在、非武装中立、平和共存という陣い、それは、非武装勢力の人民的多数派形成、労作者階級の組織的提起、その二とはとの関係めには、つまり、自主防衛の政府であつて、"抽象的"社会主義革命の情勢"などでは、明らかに果てぬものがある。又、非武装中立、平和共存の立場にたなければ、政府の軍隊による軍事同盟による平和安全論に安易にやぶれるだらう。それは、日共、民青の自主防衛論に典型的に表現されてゐる。

陣争同(共労党系)諸君、再度、どう、スバルタクスに二に、"少くとも、フロレタリヤート、人民の"民主政樹立"における非武装中立と、"とあるが、君たちは、一体、平和共存、非武装中立の立場にたつものだろうか。その二とは、明らかにした上で、"いかにして非武装勢力の陣い問題に關しての建設的討議をやるではないか?" (3)